

今号より、『おさしづ改修版』第2巻における「道」について検討することにしたい。諸井慶徳「たんのうの教理」(『諸井慶徳著作集』第3巻、道友社、1965年)では、「たんのう」の意味を「おさしづ」によって解明するにあたり、明治20～25年頃の「おさしづ」を「原始的に参考になる」ものとして取りあげている。第2巻には明治24、25年の「おさしづ」が収録されており、諸井氏に倣えば、この第2巻までの用例が、「道」の意味を理解するために「原始的に参考になる」ものであるとすることが出来るだろう。

ここでは、具体的に「道」の用例を取りあげるのに先立ち、大枠において、どのような場面で「道」が用いられているかを確認したい。そのため、第1巻について行ったのと同様に、第2巻における「おさしづ」を、割書によって「刻限」「本部事情」「真柱・家族」「本席・家族」「教会事情」「個人身上・事情」という6つの種類に分類し、それぞれにおいて「道」の用いられる「おさしづ」がどの程度あるのかを整理することにする。

### 「おさしづ」第2巻の件数と分類

第2巻の「おさしづ」全体について、最初に種類ごとの件数を整理したい。日付ごとのまとまりを1件と数えると、第2巻には952件の「おさしづ」が収録されている。これを、上記の6つにわけると次のようになる(カッコ内は全952件中の割合、小数点以下は四捨五入)。

刻限 26 (3%) / 本部事情 95 (10%) / 真柱・家族 11 (1%)  
/ 本席・家族 47 (5%) / 教会事情 377 (40%) / 個人身上・事情 396 (42%) / 計 952

このようにして見ると、「教会事情」と「個人身上・事情」の「おさしづ」が第2巻の8割強を占めていることが分かる。ここには、巻末にまとめられた「教会事情の願に対するおさしづ」は含めていないため、実際にはさらに多くの「教会事情」の「おさしづ」がある。第1巻においては、「教会事情」は117件、全体の1割程度であったので、それに比べると「教会事情」に関する「おさしづ」が大幅に増えており、各地に天理教の教会設立が相次いでいた当時の本教の活発な状況をうかがうことが出来る。

それに対して、「刻限」「真柱・家族」「本席・家族」の「おさしづ」は、第1巻においては、それぞれ96件、22件、87件であったので、それに比べるといずれもかなり少ない。これには、集録の範囲が、第1巻においては明治20～23年の4年分であったのに対し、第2巻は明治24、25年の2年分であるということが関係している。その点を勘案して、たとえば第2巻の各件数を2倍にすれば、概ね<sup>おおよ</sup>同じような件数になる。ただし、それでも「刻限」の「おさしづ」が第1巻の時期に比べて少ないということを指摘することが出来る。

### 第2巻における「道」の「おさしづ」の件数と分類

第2巻の「おさしづ」全952件のうち、「道」が用いられるものは275件ある(「道中」や「道理」など「どう」と読むものや人名に含まれているものは除く)。したがって、第2巻に

おいては、3割弱の「おさしづ」において「道」が用いられている。さらに、より集中的に「道」という言葉が用いられる「おさしづ」の特徴を確認するために、「道」が3回以上用いられる「おさしづ」を数えると125件あり、これは全体の1割強にあたる。「おさしづ」の種類ごとに「道」が用いられる件数、および、3回以上用いられる件数を示すと次のようになる(カッコ内が3回以上用いられる件数)。

刻限 20 (15) / 本部事情 28 (12) / 真柱・家族 5 (4)  
/ 本席・家族 31 (22) / 教会事情 37 (14) / 個人身上・事情 154 (58) / 計 275 (125)

第1巻におけるのと同様に、単純に件数として最も多いのは「個人身上・事情」の伺いに対する「おさしづ」で、「道」が用いられる「おさしづ」の半分以上を占めており、それに「教会事情」や「本席・家族」が続いている。

ただ、第1巻には全体で1,108件あり、「道」が用いられる「おさしづ」が502件(約5割)、3回以上用いられるものは241件(約2割)あったことと比べると、全体的に第2巻においては「道」の用いられる「おさしづ」がかなり少ないということが言える。その主な要因は、「教会事情」にある。そのことが、より浮き彫りになるように、「おさしづ」の各種類において、「道」が3回以上用いられる割合を示すと次のようになる。

刻限 15/26 (58%) / 本部事情 12/95 (13%) / 真柱・家族 4/11 (36%) / 本席・家族 22/47 (47%) / 教会事情 14/377 (4%) / 個人身上・事情 58/396 (15%)

このようにして見ると、「教会事情」における割合の低さが際立っている。件数としては最も多い「個人身上・事情」もあまり高くない。反対に、単純な件数としてはそれほど多くはないものの、割合としては「刻限」や「本席・家族」が際立って高いことを確認することが出来る。ここで挙げている「おさしづ」の種類を場面として読みかえると、次のように言うことが出来る。第2巻においては、「教会事情」について何われた「おさしづ」が、第1巻と比べて非常に多くなっているが、そうした場面においては、「道」という言葉を用いて指図をされることは少ない。さらに、「道」という言葉を何度も重ねて用いて論されることはほとんどない。これは、第1巻の「本部事情」について取りあげて、「道」がほとんど用いられない場面として整理したことと関係するかもしれない(本誌 Vol. 17 No. 3)。その「本部事情」に関して、第1巻においては教会本部の設置などの脈絡で「道」が用いられる論しがしばしば見られたが、第2巻ではあまり用いられなくなっている。また、「個人身上・事情」の場面でも、第1巻と比べると「道」が用いられることが少なくなっている。反対に、「刻限」や「本席・家族」のような場面では、第1巻において多く見られるが、第2巻においても「道」という言葉をより頻繁に用いて説かれるようになっていく。

以上のような「道」という言葉が第2巻において用いられる概況を踏まえた上で、次回以降では、それぞれの場面の「おさしづ」における「道」の用例を取りあげ、その特徴を考察することにする。